

東北公益文科大学

総合研究論集

18

鳴く鹿の和と漢

——『新撰万葉集』上巻の歌と詩を中心に

呉

衛
峰

二〇一〇年七月二〇日発行



東北公益文科大学

Tohoku University of Community Service and Science

鳴く鹿の和と漢

——『新撰万葉集』上巻の歌と詩を中心に

呉 衛峰

はじめに

『新撰万葉集』における和漢対応の姿を端的に表しているものとして、鳴く鹿・鹿鳴というモチーフのあらわれ方が注目されるべきであろう。本稿は上巻秋57の歌と詩の分析を通じて、その詩想の異同を明らかにする上、漢詩製作の実際に迫りたい。

一

まず上巻秋57の歌を掲げる。

上秋57、奥山丹黄葉蹈別鳴麋之音聽時曾秋者金敷

(おくやまにもみぢふみわけなくしかのこゑきくときぞあきはかなしき)¹

(1) 鳴く鹿の和と漢 ——『新撰万葉集』上巻の歌と詩を中心に

山の奥にもみじの落ち葉を踏み分けながら鳴いている鹿の声が聞こえてきた。この時、秋の悲しさはいっそう強く感じたのだ。「金敷」は、「かなしき」の万葉式仮名表記であると同時に、秋の山はまるで金が敷かれているようにもみじの鮮やかな黄色に覆われているという、漢字の字面の意味をも兼ねているのである。五行思想における金と秋との対応もほのめかされているだろう²。歌の主旨は「秋者金敷（あきはかなしき）」、つまり秋を悲しい季節とみる悲秋の観念である。

悲秋は、多くの識者がすでに指摘したとおり³、もともと中国文学の美意識であり、楚の宋玉の「九弁」や晋の潘岳の「秋興賦」に濫觴を見るが、後の時代の詩人たちに受け継がれ、中国文学の一つの重要な観念となっていくのである。日本文学にも次第に取り込まれてゆき、たとえば、九世紀前半の勅撰漢詩集の『経国集』巻一には、嵯峨天皇による「賦_二秋可_レ哀_一」というのがある。

a. 秋可_レ哀兮、哀_二草木之揺落_一、对_二晚林_一於_二変衰_一兮、聴_二秋声_一乎_二蕭索_一

小島憲之によると、日本漢詩では悲秋がよく詠まれたが、歌では、万葉時代には「秋の悲哀」が一般化しておらず、平安時代に入ってから定着したとのことである⁴。そして歌に定着した一つの顕著な例は、上秋57の歌における「秋者金敷（あきはかなしき）」である。

この歌において、秋の悲哀を引き起こしたのはもみじの落葉と鹿の鳴き声である。漢詩文における悲秋を見ると、
b. 悲哉秋之為_レ氣也、蕭瑟兮草木揺落而変衰。

（文選卷二十三、宋玉「九弁」）

秋の万物凋落の景色は詩人たちの目に、季節や時の移り変わりを強く印象づけるとともに、生命力の衰えと重なって映り、悲しいものと思われたのであろう。してみると、落葉は秋の悲哀感を触発するもつとも一般的な景物になったと言える。

歌の「秋者金敷（あきはかなしき）」にはこのような中国文学の悲秋観が流れているとすれば、上秋57の詩は歌のこの側面にどのように答えているのだろうか。

秋山寂寂葉零零 秋山寂寂として葉零零たり

麋鹿鳴音數處聆 麋鹿の鳴く音數處に聆こゆ

勝地尋來遊宴處 勝地にて尋ね來る 遊宴の處を

無朋無酒意猶冷 朋も無く酒も無くして意なほ冷し

秋の山は寂寞としたものだ。もみじした木々の葉が地面を覆うようにはらはらと落ちている。そしてあちらこちらから鹿の鳴き声が聞こえてきた。遙々この名所にやってきて、かつて酒宴をあげた場所にたどり着いたのだが⁵、友人たちが来ておらず、酒もなく、私は寂しい思いに沈んでいく。

詩は歌のように悲秋をおもてに出してはいない。起句は、ほぼ歌の第一句と第二句に相当し、承句は歌の第三句と第四句を写している。歌の第五句の「秋者金敷（あきはかなしき）」は、詩では「秋山寂々として」と翻案され、起句に織り込まれている。歌における、秋の景物に喚起された秋の悲哀感、「詠み手」の主観的感情に直接的に対応するのは、詩における寂寞たる秋山という景色の描写である。歌の結論は詩の前提条件に早変わりしたのである。これが詩の基調をなし、詩の言葉遣いの色合いを統合する。「零零たり」のわびしい響きと「數處に聆こゆ」が含む寂寥感もこの基調に統一されている。

このようなひっそりとした山の奥、秋の蕭条たる景色の中に、歌中の「詠み手」に対応する人物、擬似的な「私」が詩の後半に登場した。しかし、後半の展開は歌の内容に見られないものと変容していく。転句は前半のものの寂しい雰囲気とがらりと変わって、遊山の名所に「遊宴の處」を発見したと思うと、結句はこの心情の変化を打ち消す。友人は来ておらず、酒もないため、遊宴は過去のもので、今は不可能である。転句の嬉しい発見はかえって遊山者の寂しさをい

っそう深めることになる。もし詩の前半は歌の基本的内容、——落葉、鹿の鳴き声、秋の悲哀感を——、翻案しながらも歌の趣旨のうちに踏みとどまっていると言えるのなら、詩の後半は実現できない遊宴を中心に展開されたので、歌の内容から遊離しているといえよう。

一一

この新たな詩的展開は前半の描写に起因するもので、宴会という話題の出現は鳴く鹿の漢文学の通念から由来していると思われる。『詩経』の「小雅・鹿鳴」には、鹿鳴の文学起源がもとめられる。

c. 呦呦鹿鳴 食_レ野之苹 我有_二嘉賓_一 鼓_レ瑟吹_レ笙 吹_レ笙鼓_レ簧 承_レ筐是将 人之好_レ我 示_レ我周行

呦呦鹿鳴 食_二野之蒿_一 我有_二嘉賓_一 德音孔昭 視_レ民不_レ忪 君子是則是傲 我有_二旨酒_一 嘉賓式燕以敖

呦呦鹿鳴 食_二野之芩_一 我有_二嘉賓_一 鼓_レ瑟吹_レ琴 鼓_レ瑟吹_レ琴 和楽且湛 我有_二旨酒_一 以燕_二楽嘉賓之心_一

嘉賓、すなわち招待された客は、「德音孔昭」、徳の高い人ばかりなので、主人の「我」は旨い酒や美しい音楽などで客を大いに楽しませ、さらに幣帛を送ることで「我」の懇意を示す一方、その見返りのように、君子たる客たちは「我」に徳の道を示してくれるだろう。

「我」と客の関係については、「鹿鳴」篇の毛序には、「鹿鳴、燕_二群臣嘉賓_一也、既飲_二食之_一、又実_二幣帛筐簠_一以将_二其厚意_一、然後忠臣嘉賓得_レ尽_二其心_一矣」とある。嘉賓は群臣をさすので、鹿鳴という詩の旨はつまり、君主が臣下たちを宴で楽しませて、人材を珍重する姿勢を示すかわりに、臣下たちが君主の厚意に報いるように忠義を尽くしてくれるとのことである。また、『孔子家語』卷二には、「鹿鳴興_二於_レ獸_一而君子大_レ之、取_二其得_レ食而相呼_一」とあり、鹿が食べ物を見つければ仲間を呼び合うことから、徳のある人は鹿鳴という言葉を道德的に解釈し、人間にも適用したという。

ここで、鹿鳴には、二つの解釈が付与されている。一つ目は、主君が臣下を厚遇し、自分の下に有能な人材が集まるよう呼びかけることである。魏の武帝曹操は、賢才の士を招きたいという願望を歌う「短歌行」にも「鹿鳴」篇を引用している（『文選』卷二十七）。古代では、「鹿鳴」という楽曲が存在し、宴席で歌われていたことから、鹿鳴と宴会との関連はいっそう明らかになる。目加田誠は「鹿鳴」などの歌について、「始め朝廷で演奏されたものが、後にはもっと広く行われるに至ったことは当然考えられることである。」と述べている。

韓愈の詩には、宴席で「鹿鳴」が歌われる儀式を描くところがある。

d. 相公朝服立、工席歌^二鹿鳴^一、礼終楽亦闋、相拜送^レ於^レ庭

（全唐詩卷三三七、韓愈「此日足^レ可惜贈^二張籍^一」）

唐代、地方の科挙に合格した人たちは地方知事が主催する「鹿鳴宴」という祝賀兼送別（国都に赴いて進士試験に参加するため）の宴会に出席するが、そこで「鹿鳴」の詩は朗唱されていたという（清・袁枚『隨園隨筆』卷十、「鹿鳴宴」）。つまり、「鹿鳴」は君主と臣下の関係にある朝廷の饗宴で演奏される音楽、またその饗宴をさす言葉から、ひろく士人や文人の宴会を意味することばに使われるようになった。

「鹿鳴」の用例は、日本最初の漢詩集『懷風藻』に見られる。

e. 相顧鳴鹿爵、相送使人帰

（刀利宣令「秋日於^二長王宅^一宴^二新羅客^一」）

「相顧みる鳴鹿の爵」とは、「お互に顧みて（見回して）鹿鳴の歌をうたい酒杯を傾け、新羅の使者が西の方に帰るのをともに送る」ということである⁷⁾。

この士人や文人の宴会という意味は、鹿鳴の二つ目の解釈にあたる。『文選』の例を見てみよう。

f. 昔者常相近、邈若^二胡与秦^一、惟念当^二離別^一、恩情日以新、鹿鳴思^二野草^一、可^二以^レ喻^二嘉賓^一、我有^二一樽酒^一、欲^二

以贈「遠人」、願子留斟酌、叙「此平生親」

(文選卷二十九、蘇武「詩四首・其一」)

後人が蘇武の名に託したものが⁸、旅立とうとする肉親に送る離別の詩である。詩の大意は以下のようになる。鹿が野草を見て鳴いて同類を呼ぶ、その心は良き客を招くことであろう。私は一樽の酒があつて、旅に出る人に送りたい。暫くのこつて、この酒を杯に注ぎたまえ。酒を交わしながら、我々が永遠の親情を語り合おうではないか、と。「鹿鳴」篇を縮約した形で引用しながら、君主の人材重視の姿勢という毛序の意味に君子同士の友情を取って代わらせている。

蘇武の詩は、『藝文類聚』の「人部・別上」にも引かれている。同じく平安時代に愛用された類書の『初学記』を紐解くと、「鹿」の項目の下に、「求友・鳴驚」が対語として挙げられているのがわかる。この対語を説明する文を引用すると、

g. 楚詞曰、飛鳥号「其群」兮、鹿鳴求「其友」⁹。

となる。ここでは、鹿が友を求めて鳴くので、蘇武の詩におけるものと同じ含意を有する。

鹿鳴と饗宴、鹿鳴と友情、これこそ上秋57の詩の後半のよりどころに違いない。転結二句はそれぞれ「鹿鳴」という隠喩が内包する饗宴と友情のイメージを具現している。饗宴と友情とは分離して考えられるのではなく、表裏の關係にある。

おどろくことに、「無朋無酒意猶冷（朋無く酒無くして意なほ冷し）」において、蘇武の詩における鹿鳴から派生した酒と友情の表現が同じく登場している。この心情は、「遠人」と別れる蘇武の心情と同じなのだ。上秋57の詩は、歌の悲秋を鹿鳴の隠喩に置き換え、昔の交歓を思い、不在の友人を懐かしむ「私」の気持ちの寂しさを表出した。詩の後半は鹿鳴の漢文学的イメージが繰り返され、歌の内容からはみ出ていった。

詩中の秋山のもの寂しさは結局、没個性の、普遍的なものではなく、個人の経験に帰結するものである。それなら、

歌の「秋者金敷（あきはかなしき）」はどこまで漢文学的悲秋を反映しているのだろうか。詩の内容を詳しく検討した今、歌における鳴く鹿の意味を掘り下げてみたい。

二

『新撰万葉集』に先立つ寛平御時后宮歌合には、上秋57と同じ歌が次の歌（秋歌廿番・83）といっしょに配列されている。

わがためにくる秋にしもあらなくに虫の音聞けばまづぞ悲しき

私だけのために来た秋ではないのに、虫の音を聞くと、なぜ私が真っ先に悲しくなるのだ、という意味だろうか。この歌は、『古今集』において、悲秋を歌う一群の歌の中に置かれている。

（1）おほかたの秋くるからにわが身こそかなしき物と思ひ知りぬれ

古今・秋歌上・185・読人しらず

（2）わがためにくる秋にしもあらなくに虫の音きけばまづぞかなしき

古今・秋歌上・186・読人しらず

（3）物ごとに秋ぞかなしきもみちつゝうつろひゆくを限りとおもへば

古今・秋歌上・187・読人しらず

（1）と（2）では秋がもたらす悲哀感が漠然として歌われ、（3）においては「うつろひゆく」という、栄枯盛衰が悲秋の原因として詠まれている。

しかし上秋57の歌は、『古今集』において、萩と鳴く鹿の歌群に入れている。悲秋は『万葉集』においてまだ

一般的な文学観念としては現れていないと言われているが、萩と鳴く鹿の歌は多数見られる。上秋57の歌を、『万葉集』より始まる和歌の伝統における鳴く鹿のイメージを参照して考えるのは妥当であろう。

『万葉集』における鳴く鹿の歌を掲げる。

(4) 秋さらば今も見ること妻恋ひに鹿鳴かむ山そ高野原の上

万葉集1・八四・長皇子

(5) 我が岡にさ雄鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさ雄鹿

万葉集8・一五四一・大伴卿

(6) 宇陀の野の秋萩しのぎ鳴く鹿も妻に恋ふらく我にはまさじ

万葉集8・一六〇九・丹比真人

(4) の歌の前に、「長皇子と志貴皇子と、佐紀宮にして俱に宴することから、『詩経』「小雅・鹿鳴」をふまえて、鹿が宴に即して詠まれているという説がある¹⁰。うなずける説明であるが、詠まれているのは「鹿鳴」篇の野草を見て仲間を思いう鹿ではなく、妻恋いをして鳴く鹿であり、「鹿鳴」篇の影響は作歌の動機付けになるが、歌中の鳴く鹿は「鹿鳴」篇の意味に働いていない。(5) と (6) の歌でも、妻恋いをする鹿が詠まれている。(6) では、秋萩を踏みつけながら鳴いている鹿も、妻に恋することでは私には及ばないと詠まれ、妻恋いして鳴く鹿に人間の恋を重ねて表現している。

鉄野昌弘によると、万葉歌の中の鹿はほとんどが雄鹿であり、妻恋いをして鳴く雄鹿のモチーフは和歌の発想として定着し、後の世代にも受け継がれていくのである¹¹。また、鹿鳴の漢詩的詩想の影響について、鉄野は『詩経』小雅の「鹿鳴」篇が、家持や卷十の歌の題詞などに影響を与えていると見られるが、「妻恋いをして鳴く雄鹿のモチーフが」鹿との共感関係を基礎にし、相聞情調をまとりつかせた、和歌の世界で独自に育てられた景物と言ってよさそうである」

と分析している^{1,2)}。卷十の歌の題詞というのは、二二四一から二二五六の一群の歌の前に冠された「鹿鳴を詠む」を指す。

『万葉集』における鳴く鹿のモチーフは、妻恋いという枠組みの中に、横と縦の二つの線で織りなされている。横の線は萩——季節的には秋萩——との取り合わせで、秋萩を雄鹿の妻とみたと、初萩の花に求婚する鹿、または散る萩を悲しんで鳴く鹿が詠まれる。縦の線は鳴く鹿と相聞との共感関係で、妻恋いして鳴く鹿に人間の恋心を重ね、恋する相手への思いを託して詠まれる。

このようなモチーフは『古今集』に受け継がれている。右に言及した『古今集』の歌群をみよう。

(7) 山里は秋こそことにわびしけれしかのなく音に目をさましつ、

古今・秋歌上・二一四・忠岑

(8) 奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき

古今・秋歌上・二一五・よみ人しらず

(9) 秋はぎにうらびれ居ればあしひきの山下とよみ鹿のなくらむ

古今・秋歌上・二一六・よみ人しらず

(10) あきはぎをしがらみふせてなく鹿の目には見えずてをとのさやけさ

古今・秋歌上・二一七・よみ人しらず

(11) 秋はぎの花さきにけり高砂のおののしかは今やなく覧

古今・秋歌上・二一八・藤原敏行

右の歌に共通するモチーフは鳴く鹿である。(7)と(8)は、「秋こそことにわびしけれ」と「秋はかなしき」という表現をもって、悲秋をあきらかにしている。(9)から(11)までは、鳴く鹿と秋萩との関連が主題となっている。そ

こで、萩とは明言しないものの、(8)における「紅葉」は(9)(10)(11)とおなじく萩であるという見方ができたのである¹³。

「秋はかなしき」という歌の前に位置する(7)では、鳴く鹿を聞くときのわびしさは漠然としたもので、特定できない。すぐ後に位置する(9)の歌では、萩と妻恋が詠まれている。

私たちはこの歌より、恋歌と判断する材料は得られない。しかし、『万葉集』の伝統から『古今集』における鳴く鹿の恋歌までを顧て、すくなくともここには、番の漢詩に見られるような、漢文学における男性同士の友情を暗示するものは皆無であると言えよう。

津田左右吉は歌における悲秋を論じるとき、歌にあらわれる秋の悲哀は具体的な気分の描出というより、むしろ既定の概念であり、漢詩文の悲秋観をそのまま観念として取り入れたものだとして述べた。津田によると、上掲(2)と(8)の二つの歌においても、虫の音や鹿の声が秋の悲しさを引き起こしたものととして詠まれたというものの、それが万葉時代には歌人たちに悲しみを誘わなかったもので、やはり秋とは関係なく、虫の音や鹿の声自身が誘った悲しさだとい¹⁴う。

しかし、悲秋が観念であるなら、万葉集におけるような、秋を賞美する趣向も一種の審美的観念である。また上秋57の歌には、秋と切り離せない関係にある「黄葉」——おそらくは萩の落葉であろう——があり、とうぜん秋の悲哀感の誘因になる。これに対して、詩の方では、悲秋の思想が、鹿鳴というモチーフの漢詩的展開を媒介にして、友無き孤独感によって具体化されたといえよう。

四

和漢文学が共有する秋の悲哀、歌と詩の伝統における鳴く鹿・鹿鳴のそれぞれの通念を一通り調べると、『新撰万葉集』

の上秋57の歌と詩の対応関係がおのずから見えてきた。

詩は「秋山寂寂葉零零、麋鹿鳴音數處聆（秋山寂寂として葉零零たり、麋鹿の鳴く音數處に聆こゆ）」という起承の二句でおおよそ歌の内容をうつし、それを足場に、「勝地尋來遊宴處、無朋無酒意猶冷（勝地にて尋ね來る遊宴の處を、朋も無く酒も無くして意なほ冷し）」という転結の二句で、歌意から独立した詩的世界を展開した。この転結の部分は「秋者金敷（あきはかなしき）」に対する、詩による具体化であると同時に、「鳴麋之音（なくしかのこゑ）」に対する詩の対応でもあろう。

歌における「鳴麋之音（なくしかのこゑ）」にたいして、詩は漢文学における宴と友情の象徴である鹿鳴をもつて対応している。この対応が到底詩による歌の解釈とはいえないことは明白な事実であろう。悲秋の觀念は和漢文学が共有する文学觀念である以上、詩に再現されることは至極当然のことだが、友情を以て歌における妻恋いという通念をもつ鹿の鳴き声に対応するのは、詩作者が歌の内容を単純にうつすより、詩作にあたつて類似の題材、類似のモチーフを詩の伝統ののちとつて表現し、詩的世界を構築しようとする意図があるからだと読み取れる¹⁵⁰。

この結論を裏付けるに、『新撰万葉集』において鳴く鹿を詠むもう一首の歌を掲げてみよう。

上秋60、秋山丹戀爲麋之音立手鳴曾可爲死君歟不來夜者

（あきやまにこひするしかのこゑたててなきぞしぬべききみがこぬよは）

秋の山に妻恋いをする鹿が声を立てて鳴いているように、私は声を立てて鳴いてしまふそうだが、なぜかといって、今晚あなたが来てくれないのだから。『万葉集』以来の妻恋いする鹿の伝統をそのまま受け継いで、妻恋いする鹿に恋人を待つ人間の気持ち、鹿の鳴き声に人間の泣くことを重ねて表現している。

その左の漢詩を読んでみると、

独臥多年婦意睽 独臥の年多く婦意睽く

秋閨帳裏挙音啼 秋閨の帳裏にて音を挙げて啼く

生前不幸希恩愛 生前不幸にして恩愛希なり

願教蕭郎枉馬蹄 願はくば蕭郎をして馬蹄を枉げさしむ

ひとりぼっちの生活を長く過ごし、さびしい思いをしている女は、秋の閨房の中に声高に泣いている。どこかいい男がいて、私のところにきてくれないのかしらと、心中に願っているのだ、という詩である。

この問題は、歌における鹿の鳴き声が、詩では女性の泣き声になっていることである。鍵は依然、鳴く鹿に関する和文学と漢文学の伝統との違いにあるはずである。漢詩では、鹿鳴が意味するものは男同士のつきあいなのであって、男女の恋との関連はあり得ない。上秋60の漢詩は、歌の主旨である一人寝する女のつらくて泣きそうな心情と、歌の表現技巧の中心となる鹿の鳴き声とを混在させたならば、この漢詩を「漢詩」として理解するとき、すなわち漢文学の伝統にしたがって解釈するとき、詩の主旨と、表現の隠喩的意味あいとの間に矛盾が生じることになる。この矛盾をさけるには、表現と主旨のどちらか一方を妥協させるしかなく、結果的に見て、秋60の歌における鹿の鳴き声が比喩的に意味する女性の泣きそうな気持ちは、詩において顕在化して、女性が声高に泣いているという描写になっている。

おわりに

以上、鳴く鹿・鹿鳴というモチーフの詠み方を通じて、『新撰万葉集』における歌と詩の対応関係の一つの典型を見てきた。そこに、歌と詩という二つの文学世界の対照的対応がはっきりと看取できよう。

最後に、詩について二点を付言する。まずは詩形の問題である。日本漢詩において七言絶句が多くなったのは中唐以降の詩風の然らしめたところである¹⁶。筆者は以前、翻訳という意味で三十一文字の歌に対応するには、七言二句も

しくは五言四句が最適だという主張に賛同の意見を述べたことがある¹⁷。それにもかかわらず、『新撰万葉集』の漢詩が七言絶句の形式を取っていることには、通念上の漢詩を作ろうという意図が確認されるであろう。

次ぎは内容の問題である。詩は流行の白詩の詩風と言いがたい。盛唐以降では、鹿鳴はすでに背景に退いて、景物として描かれることが多く、詩経の意味が前景化することが希である。上秋57の詩は白詩よりも、むしろ前掲した蘇武詩のような六朝詩の影響が強く見られる。

ただし、白詩の影響が圧倒的だった時代に、流行の七言絶句の形式を取りながら、作詩にあたっておもに『文選』を参考にしたとは考えにくい。『藝文類聚』や『初学記』等の類書が作詩の手引となっていたのではないかと推測される。そうすると、上秋57の詩を含め、『新撰万葉集』上巻の漢詩のかんりの部分は、習作的な作品として見るべきではないかということができよう¹⁸。さらなる論証が必要であるから、今後の考察に期したい。

注：

1 本稿における『新撰万葉集』の引用は、元禄九年版本（浅見徹監修、乾善彦・谷本玲大編『新撰万葉集』諸本と研究』研究叢書300（和泉書院、2003・9）による。ただし、異体字を通用漢字に直しているところがある。

2 『新撰万葉集』の歌では、「金敷」という表記は他にも五例があるが、順番から見れば全部上秋57の歌より後だから、その例に倣ったと考えられる。なお「金敷」の本意については、注5の『新撰万葉集 上巻（二）』に新聞一美による考察がある。

3 小尾郊一『中国文学に現れた自然と自然観』（岩波書店、1962・11）「悲秋」の詩——その発生と定着」、渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、1991・1）「立秋詩歌の周辺」、川本皓嗣『日本詩歌の伝統——七と五の詩学』（岩波書店、1991・11）「悲秋」と「夕の恋」を参照。

4 小島憲之『古今集以前』（塙書房、1976・2）、一〇五頁および一五四頁。

新撰万葉集研究会『新撰万葉集注釈 卷上(二)』(和泉書院、2006・2)、一〇九―一二六頁(新聞・美執筆)を参照。

『目加田誠著作集』第二卷、定本詩経訳注(上)、(竜溪書舎、1983・9)、三二〇頁。

小島憲之校注『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』日本古典文学大系(岩波書店、1964・6)、一二七頁。

狩野直喜『両漢字術考』(筑摩書房、1964・11)「前漢の五言詩といはるるものに就きての疑問」を参照。

『楚辭章句』卷第十三、七諫第十三、謬諫。後漢王逸撰。

小島憲之・木下正俊・佐竹昭広校注・訳『万葉集・一』完訳日本の古典2(小学館、1989・4)、七十九頁。

『万葉集自然表現事典』『国文学 解釈と教材の研究』第33巻1号(学燈社刊)、「鹿」という項目。

『日本後紀』巻七の逸文には、「庚寅、遊獵於北野、便御伊豫親王山莊、飲酒高會、于時日暮、天皇歌曰、氣佐能阿狹氣、奈久知布之賀農、曾乃己惠遠、岐嘉受波伊賀之、与波布氣奴止毛、登時鹿鳴、上欣然、令群臣和之、冒夜乃歸」とあり、毛詩的鹿鳴が歌に詠まれている希な例であるが、律令制度下の勅撰国史という漢文的文脈にこそありうる詠み方であらう。

奥村恒哉校注『古今和歌集』新潮日本古典集成(新潮社、1978・7)、九一頁。

津田左右吉『思想・文藝・日本語』第四「おもひだすま、」(十五)「秋の悲しさ」(岩波書店、1961・6)。

野口元大『新撰万葉集』『日本古典文学大辞典』第三卷(岩波書店、1984・4)を参照。

岡田正之『日本漢文学史』(共立社書店、1929・9)、一二〇―一二二頁。

「和歌と漢詩・詩的世界の出会い——『新撰万葉集』をめぐる」『比較文学研究』67号(東大比較文学会、1995・10)。拙稿「『新撰万葉集』における漢詩への一視点―夏の「蟬」をめぐる―」『国語と国文学』83巻3号(東京大学国語国文学会、2006・3)では、異なるアプローチから同じ主張をしている。